

碑文を蘇らせる

災害の記録や教訓を伝える石碑が長い間に風化して、碑文が判読できなくなることがあります。このため、石碑をつくりかえるなどして、先人の思いを次の世代に伝える取り組みが行われています。徳島県海陽町と高知県須崎市の例をご紹介します。

■浅川天神社の安政南海地震津波碑（徳島県海陽町）

海陽町浅川の天神社境内には安政南海地震津波碑が建っています。旧碑の石文が判読困難になったため、平成6年（1994）11月に再建されました。安政の津波碑文には、安政元年（1854）11月4日辰刻（午前7時～9時頃）地震が起こり、巳刻（午前9時～11時頃）には汐が狂ったように道路まで打ち込んできたので、人々は山上に逃げ登ったことや、翌5日申刻（午後3時～5時頃）大地震が起こり、その後高さ3丈（約9m）の大波が射った矢のような早さで打ち寄せ、その夜は大汐が何度も襲ってきたため、天満宮・大年・御崎の三社、浅川浦の三つの寺は残ったものの、その他の家はすべて流失したが、用心していたので村中にけが人はなかったことなどが記されています。〈海南町史編さん委員会編「海南町史下巻」1995年など〉



天神社の安政の津波碑文



浅川天神社



(地理院地図に加筆)

■原町地蔵堂の南海地震記録碑（高知県須崎市）

須崎市原町の地蔵堂境内には南海地震記録碑が再建されています。昭和34年（1959）8月に建てられた石碑が風化したため、つくりかえられたものです。碑の裏面には、昭和21年（1946）12月21日午前4時過ぎに大地震が起こり、震動18分が終わって約20分後に最高潮が平地で8尺に及ぶ大津波が来たため、倒壊家屋132戸、流失45戸、溺死者53人の被害が出たことが記されています。さらに注意書きとして、地震直後は火の始末をすること、津波の時には速やかに山手に避難することなどが刻まれ、最後に「災難は忘れた頃にやってくる」と結んでいます。（大家順助編「須崎消防の歩み 第2巻 自然災害の記録」高幡消防組合須崎消防団本部、1985年など）



地蔵堂の南海地震記録碑



原町の地蔵堂



(地理院地図に加筆)